

〔西鶴名殘之友〕四乞食も橋の渡り初め
 時に彼の老人、數多の者共を近ふ呼びて、萬を我にあやかるべし、略○中心の樂みを申せば、何れも
 あやかり者として、竹の箸切て貰ひける、

〔後水尾院當時年中行事八上八〕十五日、名月御さかづき、つねの御所にて參る、まづいも、次ニ茄子を
 供す、なすびをとらせまし、て、萩のはしにて穴をあけ、穴のうちを三反はしをとほされて、御
 手にもたる、

〔東都歲事記六二六〕十四日 今明日龜戸香取太神宮祭禮略○中 祭禮の式都ていにしへの儘にて、
 御供として小麥をふかし、それへき葉芋の葉を粉にせしなりの粉をかけて、薄の箸をそへて、御假屋にて寶前
 に供し、産子の人民も是を食す、

〔大和物語下〕少將宗○眞岸には、ひろき庭に生たるなをつみて、むし物といふ物にして、ちやうわん
 にもりて、はしには梅の花のさかりなるをおりて、その花びらにいとおかしげなる女の手にて
 かくかけり、

きみがためころものすそをぬらしつ、はるの野にいでてつめるわかなぞ拾遺和歌集
 〔安齋隨筆前編十五〕ながえのてうしにもみちのかわらけ略○中 赤板のはしを、紅梅のはしと云
 に同じ意也、

〔町人囊四〕ある人のいへるは、いにしへの奢りといふは、今の質朴なるといふ程のことなり、略○中
 唐土の天子なれば、常に象牙の箸を用ゆといふ共、驕りといふべき程の事にあらね共、天子とい
 へども、古は象牙の箸など用る事なく、竹又は木の箸を用ゆと見えたり、近代唐船より象牙の箸
 はいふに及ばず、瑪瑙琥珀にて造たる盃、色々の彫物多く持渡れり、今は奢とも珍し共、いふ人な
 し、